

## 感謝の日

「年に三度、わたしのために祭りを行わなければならない。」出 23:14

11月23日の勤労感謝の日は、「勤労をたつとび、生産を祝い、国民たがいに感謝しあう」とされています。

その源は天照大神にさかのぼり、飛鳥時代から続く新嘗祭にあります。天皇をはじめとして、それぞれの地方の神社で、その年に収穫された新しい穀物を供えて感謝するとともに、食する祭りが本来の姿です。戦後の勤労感謝の日は、神道色を払拭するため、収穫ではなく、「勤労を貴び、生産を祝い」、感謝は、「国民が互いに」行うものとなっています。残念ながら、対象も主体も、ややポイントがぼけた気がします。神道が古代教会の残りであるなら、新嘗祭の考え方をとったほうが、考え方は明快です。すなわち収穫を神に感謝することです。

米の感謝祭(Thanksgiving)は、ほぼ同じ時期で、七面鳥を家族で食べるイメージがありますが、本来は収穫を神へ感謝する、あるいは移民当時、食糧を与えて助けてくれたインディアンに感謝するものと言われています。

冒頭の聖句に出てくる、神に捧げることを命じられた、三つの祭りとは、何でしょうか？

「祭り」は、本来、特定の日に神仏・祖先に、身を清め、供物をささげて祈願・感謝・慰霊などを行うことであり、洋の東西を問わずに、普遍的に行われています。捧げる感謝とは、何に対する感謝でしょうか？これがわからなければ、実は何もありがたく思っていないことになり、口先だけの、そしてご馳走をいただくだけのお祭りとなってしまいます。

聖句にいう三つの祭りとは、「種を入れないパンの祭り」、「あなたが畑に種を蒔いて得た勤労の初穂の刈り入れの祭り」、「年の終わりにはあなたの勤労の実を畑から取り入れる収穫祭」この三つです。それぞれ「過越しの祭り(ペサハ)」(2014年なら4月15日から)、それから五十日(7週、5旬)後の「七週の祭り(シャブオット)」、ギリシア語では、ペンテコステ(五旬節) (2014年なら6月4日)、そして最後は「仮庵の祭り(スコット)」(2014年なら10月9-10日)とも言われています。

イスラエル民族にとっては、囚われていたエジプトから脱出した日が「過越しの祭り」であり、「刈り入れの祭り」はカナンの地への導入を、「収穫祭」はカナンの地への居住を意味します(天界の秘義 9294:4,5 参照)。

イエス様ご自身も地上におられたころ、過ぎ越しの祭りには何度もエルサレムに上られ、最後の十字架上の苦難も、過ぎ越しの祭りの中にエルサレムに上られています。ただ、「収穫祭(仮庵の祭り)」には、「兄弟たちが祭りに上ったとき、イエスご自身も、公にはなく、いわば内密に上って行かれ」(ヨハネ 7:10) たとあります。

霊的な意義はきわめて明確です。これらの「年に三度の祭り」は、絶えざる主への礼拝と、墮地獄への破滅から解放されたことへの感謝です。年に三度だけ感謝すればいいということではなく、すべての期間

(年)の最初から最後まで(三)、主に感謝し、礼拝しなさいということを命じておられます。何を感謝するのでしょうか？三つの祭りの中身を見てゆきましょう。

「種を入れないものの祭り」、過ぎ越しの祭りは、偽りからの清めを、「刈り入れ祭り」は善の中への真理の植え込みを、「収穫の祭り」は、善の植え込み、そして破滅からの完全な解放を感謝し、主に祈ります。そして、その各段階を通して抱き続ける「信仰の真理」には、主が絶えず現れ、存在されていることが、「年に三度、男子はみな、あなたの主、エホバの前に出なければならない。」によって意味されています。

この過程は、人の再生の過程です。再生には、悔い改め～改良～再生の三段階が必要です。地獄に囚われ破滅に突き進む状態から、この三段階を通して主に清められ、改良され、全く新しい人間として生まれ変わり、永遠の生命を受けます。そして、どの段階にも、主の力がたえず働いています。

「人は再生の間、まず、最初に自己愛と世俗愛の悪からわき起こる偽りから清められなければなりません。これは悪と地獄、そして破滅についての教え、善と天界そして永遠の幸福について教えを受けることによって、そして悪を行い、意図し、考えることから退き、これを耐えることによってもたらされます。」(天界の秘義 9294-2)

この段階が、過ぎ越しの祭りによって意味されています。何が悪かを知り、自分が考え望み行う悪を、じっと耐えながらやり過ごします。それは本人にとって、自分の愛するものを避けるため、苦痛であり、苦い葉を食べるようなものです。これを七日間、すなわち俗・悪と完全に区別され、聖なるものとなるまで、耐えます。これを耐えるのは、主のお力が働かなければ、私たちには不可能です。私たちはほっておけば、悪に向かう遺伝を持ち、絶えずその悪を探し求めているからです。悪にくじけそうになったとき主を見上げ、じっと耐えて悪をやり過ごします。目の前に来る悪、ちらつく魅力的に見える悪を、これを考え、欲し、行うことは主に対する罪であると意識して、避け続けること、これが主に絶えず祈り続けることであり、自らを低くして、主に従う、絶えざる礼拝です。すると主の力が働き、悪からの清めが成就します。これをなし終わったとき、これが自分ではなく、主のみ業であったことを確認して、心から感謝します。

「そして土壌に準備ができたとき、信仰の真理が撒かれます。それ以前には信仰の真理は受け付けられません。しかし撒かれる真理は、善の内に植え付けられなければなりません、なぜならその他に土壌はなく、またその他に根をはれるところがないからです。人が真理を意志し、愛し、行うとき、善の中に植えられます。」(天界の秘義 9294-2)

この段階が、第二の収穫の祭りです。「収穫とは、善を産み出す真理を意味するからです。」

「真理が善の中に植えられたとき、人は真理によってではなく、善によって主に導かれます。これは善を意志し、愛への情愛から善を行う、すなわち仁愛をなすことによってもたらされます。」(天界の秘義 9294-3)これが第三の祭り、刈り入れの祭りです。撒かれた種、真理が育って、たわわに実り、頭を下げている稲穂が見渡すかぎり風にそよいでいます。仁愛という実が実り、これを刈り入れる時、これが第三の祭りです。自己愛と世俗的な愛にうずまき地獄から完全に解放され、隣人に対して、優しい思いやりと将来を見通した深い考えか

ら、役立ちを行う仁愛のスフィアの内に深く入ります。これが天界です。

第三の祭りは、再生の完了であり、本来内が神であられる主イエスにとっては、マリアからきた遺伝悪を持つ人間性を脱ぎ去り、完全に神的なものと結合する栄化です。そのため、「あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りには行きません。わたしの時がまだ満ちていないからです。」、と主イエスは「仮庵の祭り」に行くのを、表向きに否定されました。イエスを貶めようとした兄弟たちに、祭りに上れとおっしゃったのは、イエスの神性を否定して、人類を救うただお一人の力を拒んだため、最後の審判がなされたものとも解釈可能でしょう。

この三つの祭りの過程は、霊的教会、霊的真理が、エジプトという偽り、自分では罹患したとも知らない、百パーセント死に至る伝染病の巣から、自分の病名とその恐ろしさを伝えられ、救い出されて集中治療室に入り、まず真理という薬を与えて病んだ部分を癒やして、さらに善という本物の滋養を豊かに摂って、失った体力を回復し本来あるべき健康な体を取り戻してゆく過程にも似ています。重い病の治療には、長い時間がかかり、社会復帰に時間がかかるように、健康体にもどるには様々なステップを踏まなければなりません。また、治療の手や薬を拒み、豊かな滋養も拒むならば、もとの不健康な身体にもどり、重い病も戻ってきます。その長い治療の間、主のみ業を、謙虚な心で受け続け、自分の霊的な身体が、次第に回復し健康体に戻ってゆくことを喜びます。喜びから感謝し、感謝することで主のみ業を引き続いて受け入れます。

「情けは人のためならず」という日本語の言い回しがありますが、これは情けをかけることで、回り回っていつか自分が困った時、人が情けをかけてくれるというものです。主への礼拝と感謝は、主のためではなく、自分のためです。礼拝と感謝によって、私たちの喜んで受け入れる心が増すからです。美味しいものなら喜んで口にして食べ、吸収する力も増えて回復も進みます。

本物の礼拝と感謝のために、さらに五つの処方、注意点が命じられています。

「年に三度、男子はみな、あなたの主、エホバの顔の前に現れなければならない」（出エ 23:17）  
男子で表される「信仰の真理」には、「エホバの顔」であらわされる主の愛が絶えず存在し、現れていなければなりません（天界の秘義 9297 参照）。人の内の善は、主のみ住まいです。善のない真理は、主が存在できません。「エホバの顔の前に現れる」ためには自分自身の何かのために強迫的な信仰を持って生きるのではなく、主のために善き役立ちの生を送らなければなりません（〃）。

「わたしのいけにえの血を、種を入れたパンに添えてささげてはならない。」（出エ 23:18 前）  
教会の真理である善から発した真理、「いけにえの血」を、悪から発した偽りである「種を入れたパン」と混ぜてはなりません。それが混ざらないように、細心の注意を払わなければなりません。礼拝に、そして自分の行動に、私心を差し挟んでないか、自分の行動を絶えず振り返る必要があります。

「また、わたしの祭りの脂肪を、夜を越えて、朝まで残しておいてはならない。」（出エ 23:18 後）  
礼拝の善である「わたしの祭りの脂肪」は、人のものである「夜」からではなく、主のものである「朝」から行わなければなりません。そして常に新しく、新鮮に。（天界の秘義 9299 参照）絶えず、新鮮な気持ちで

感謝し、自分を低くして主を礼拝しなければ、マンネリとなり、単なる形だけの繰り返しとなります。それは、人のものとなってしまい、悪と偽りに墮してしまいます。主の絶えず行われるみ業を。前からではなく、後ろから見ようと常に心がけていれば、いつも新鮮な気持ちで感謝と礼拝が行えます。何も見ずに、漫然と感謝しても、それは本物の感謝ではありません。

「あなたの土地の初穂の最上のものを、あなたの神、エホバの家に持って来なければならない。」(出エ 23:19 前) すべての善の真理と、真理の善は神聖です。なぜならそれは主からきているから・・・これを主に帰することは、何をさしおいても最初に行くべき事です。(天界の秘義 9300 参照) この善と真理を自分に帰すことは、十戒で禁じられた盗みです。隣人に善いことをした、社会に役立った、教会に善いことをした、これらを自分の功績にしてはなりません。それは隣人や社会や教会に、あなたを通して主が働かれているものだからです。単なる謙遜ではありません。それはまことに自分のものではないからです。

心臓が動いているのは、自分の力でしょうか？見、聴き、嗅ぎ、味わい、感じることは自分の力でしょうか？時にそれは、あたかも自分の力のように感じますが、根本的に自分の力ではありません。自分の意志ではなんともできないからです。同じように何か善いことを行い、あるいは真理を知り得たとしても、どこか自分の奥底に潜む別の動機が動いています。善と真理は、自分から行いますが、その後でそれはことごとく主の働きからきて、私たちはその主のみ業が自分の手を通して完成されたと認識し、喜び、深く感動し、感謝します。すべての善と真理は、自分のものであることを否定して、主のみ業として認識すること、これが真の喜びと感謝を生みます。

「子やぎを、その母親の乳で煮てはならない。」(出エ 23:19 後)

最初の状態、幼いころの純真無垢の真理「母親の乳」と、主への愛から深い知恵を得て行う後の状態の無垢の善「子やぎ」は、混同(煮る)してはならない、と命じられています。

知恵の中に宿る本物の無垢は、人は自分ではどんなことも理解し行うこともできないと知り、認め、信じることにあります。すべて自分によって理解し、意志することを拒み、ただ主の力によってそうすることです(天界の秘義 9301 参照)。これが最高の天使の状態であり、彼らは筆舌に表しがたい、深い喜び、平安の中にいます。再生の各過程にあつて、絶えず主の働きを後から確認し、喜びを持って、感謝し礼拝することで、人は主の力を受け入れ続けることが可能となり、この最高の天使の持つ状態に至ることができます。

「見よ。わたしは、使いをあなたの前に遣わし、あなたを道で守らせ、わたしが備えた所にあなたを導いて行かせよう。」(出エ 23:20) アーメン。

## 出エジプト記 23:14-19

年に三度、わたしのために祭りを行わなければならない。

種を入れないパンの祭りを守らなければならない。わたしが命じたとおり、アビブの月の定められた時に、七日間、種を入れないパンを食べなければならない。それは、その月にあなたがエジプトから出たからである。だれも、何も持たずにわたしの前には出なければならない。

また、あなたが畑に種を蒔いて得た勤労の初穂の刈り入れの祭りとして、年の終わりにはあなたの勤労の実を畑から取り入れる収穫祭を行わなければならない。

年に三度、男子はみな、あなたの主、エホバの前に出なければならない。

わたしのいけにえの血を、種を入れたパンに添えてささげてはならない。また、わたしの祭りの脂肪を、朝まで残しておいてはならない。

あなたの土地の初穂の最上のものを、あなたの神、エホバの家を持って来なければならない。子やぎを、その母親の乳で煮てはならない。

## ヨハネ 7:2-10

さて、仮庵の祭りというユダヤ人の祝いが近づいていた。

そこで、イエスの兄弟たちはイエスに向かって言った。「あなたの弟子たちもあなたがしているわざをすることができるよう、ここを去ってユダヤに行きなさい。自分から公の場に出たいと思いながら、隠れた所で事を行う者はありません。あなたがこれらの事を行うのなら、自分を世に現しなさい。」

兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。

そこでイエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも来ているのです。世はあなたがたを憎むことはできません。しかしわたしを憎んでいます。わたしが、世について、その行いが悪いことをあかしするからです。」

あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りには行きません。わたしの時がまだ満ちていないからです。」

こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。

しかし、兄弟たちが祭りに上ったとき、イエスご自身も、公にではなく、いわば内密に上って行かれた。

## 天界の秘義 9286.

「年に三度、わたしのために祭りを行わなければならない。」これが、絶えざる主への礼拝と、破滅からの解放への感謝を意味していることは、「祭りを行わなければならない」の意味が破滅から解放されたことへの喜びの心から主を礼拝すること (7093 参照)、さらに、「年に三回」の意味が、最後にいたるまでの完全な状態であることから明らかです。「三」は最初から最後に至るまで満ちていること( 2788, 4495, 7715, 9198)、「年」がすべての期間を意味している( 2906, 7839, 8070 参照)ことから、完璧な解放となります。なぜなら、「種をいれないものの祭り」によって、偽りからの清めが意味され、「収穫の祭り」によって善の中への真理の植え込みが意味され、「刈り入れの祭り」によって、そこから得た善の植え込みが、すなわち破滅からの完全な解放が意味されます。まぜなら人が偽りから清められれば、その後、真理によって善がもたらされ、最後に善の内にいるなら、そのとき人は主とともに天界にいて、従って完全に解放されているからです。

[2] 破滅からの解放の連続した段階は、再生の連続した状態に似せて置かれています。なぜなら再生は主によ

る地獄からの解放と天界への導入であるからです。なぜなら、再生されている人は、最初は偽りから清められ、続いて、信仰の真理を仁愛の善に、植え込まれ、そして最後に善自体を植え込まれるからです。そしてこれが成されたとき、人は再生され、主とともに天界にいます。

そのため「年に三度の祭り」によって、再生されたことで主の礼拝と感謝も意味されています。これらの祭りは、これらのことを永遠に記念するため制定されたため、礼拝と感謝は「継続的な」と言われ、礼拝の主要な事柄は、とこしえまで続くと言われています。とこしえまで続く、ということは記憶にだけではなく、生命に書き込まれなければなりません。そのときこれは人間を普遍的に治めると言われます（5949, 6159, 6571, 8853-8858, 8865 参考）。